

# 大地

24号  
1995. 3. 15  
真宗大谷派浄国寺  
☎ 23 5724

## 雑詠

山崎 睦

健やかな日々をいただき師走なる

雷に今度は根雪かと思ふ

生かされて七十九才除夜の鐘

除雪車をよけられるだけよけて待つ

冬晴の手庇の中鳶の舞

まだ降るか一晴あるか雪小止み

梅林の小径三三五五の人

### 一枚の色紙

山崎 隆 昌

乱雑きわまりない僕の部屋の壁に二枚の色紙が掛かっている。その一枚は次のもの

掌に 小虫をのせ歩かせる  
その急ぎ足をかなしむ  
人生に似ている。

病床で 高見順

勿論複製であるが、僕には大切な色紙。これは食道癌に罹り自らの死期を意識し「死の淵」にあった高見順の絶筆に近いもの。入院中のベッドの上に見付けた小さな虫を何気なく掌の上に乗せてみたのである。せわしなく動く虫の動きに自らの人生を見る。そのことを「かなしむ」と高見は言う。

この「かなしむ」は掌から逃げようと必死に歩む小虫への憐憫や哀みのようなものではない。そうではなく、小虫の急ぐ歩みに高見自身の人生を重ね、そこに虫への共感あるいは共生を見たのではないだろうか。

同じ時期（最後の入院中）に書かれた詩集に「死の淵より」があるが、その中の一編「帰る旅」の

詩の一部に同じものを見出すことができる。

(略)

この旅は  
自然へ帰る旅である  
帰るところのある旅だから  
楽しくなくてはならないのだ  
もうじき土に戻れるのだ

(略)

大地に帰る死を  
悲しんではいけない  
肉体とともに精神も  
わが家へ帰れるのである

(略)

死を直前にした高見順には、同じ大地から生まれ同じ大地に還るものとして、人間も小虫も区別なく生きることの悲しみへの共感があったのだ。

親鸞聖人は『歎異抄』の中で、「一切の有情（命ある全てのもの）は皆もて世々生々（遠い昔から）の父母兄弟なり」と述べておられる。

さて、もう一枚の色紙は、癌に倒れた父が亡くなる直前に書き遺してくれたもので、齊藤茂吉の歌

水すまし  
流れにむかひ 逆のぼる  
汝が勢ひよ 微かなれども

## 若い日の槍ヶ岳

高田本町  
石田 弘子

今から四十年前の二十二才の頃の思い出です。娘時代私は、山にとりつかれておりました。ときめきを覚えていたのは「槍」だったのです。あの当時私の生まれたひなびた町では「槍へ行きましよう」と声をかけても、のってくれる仲間はないか見つかりませんでした。まして、女の子は一人もいませんでした。それなら「私一人で決めるしかない」とプランを立てました。そして近所に住んでいた八才年下のいとこの少年を連れていくことにしたわけです。

妙高や火打や戸隠へ登っても、白馬、立山、乗鞍、常念……どこの山へ登っても、はつきり見ることのできる「北アルプスの盟主」といった感じのある秀麗雄大な「槍ヶ岳」(三一八〇メートル)へは何としても登ってみたいというはるかなる熱い思いがありました。「あの山へ行ったら来なければ私

には何も始まらないのだ。勿論結婚もできないのだ」という、あの種のペナルティを自分に課していました。まず燕岳(二七六三メートル)に登りそこから大天井岳(二九二二メートル)を越えて槍に向う。槍から上高地へ下山する。というルートを選びました。

松本駅前の小さな宿で前泊しました。当時の大糸南線の「有明」という駅に降り立った時、見知らぬ山男が迎えてくれて「ガイドを頼まれた」と先導をかって出ましたが、その思いがけない人にはタバコを買って、お断りしたので思い出します。後になってそれは心配した母が手を打ったのだということを知りました。

目指す槍の雄姿が、山脈のはるか彼方に望める燕山荘を早朝に出発して槍へ向いました。いとこの少年は私にとって心強いパートナーでした。尾根を渡り谷を下り、岩場を登って大天井岳から西岳小屋を越え、東鎌尾根を伝い、槍ヶ岳の頂上に着いたのは夕方近くになっていました。「あゝ私の情熱で、とうとうここまで来たんだ」という大きな

感激がありました。頂上の展望は、近くに遮るものが何もなく息をのむ程素晴らしい。そこには小さな祠があつて一本の槍が穂を天に向けてつきさしてありました。わずかな平担部は二十人程が辛うじて坐れる位のものでした。

翌朝、槍ヶ岳山荘から見える穂高の峰々にまた魅かれてしまいました。このままここから行ってみたい、というはやる気持ちを押しえながら帰途に着いたのでした。

下山の時、氷河地形の槍沢の雪渓で足を踏み外し、どんだん自分の体が転がり落ちていくのをどうすることも出来ませんでした。

「ひろこさん」と叫ぶ少年の声が耳に入っていました。運よく大きな岩石にぶつかってやっとなりました。

上高地に着いてよく見たら、大腿部が三十センチもの黒いアザになっていました。

今でも「山」特に北アルプスの山々や上高地の若緑の樹々や、梓川のある神秘的な青の色などの写真を見ただけで、身震いがきてしまう程です。山への、そして若か

った日々へのノスタルジアがよみがえってまいります。

あの当時、「檜へは自分の情熱だけで登ってきたのだ。」という思いでおりましたが、今ふり返ってみれば、私をつつむ大きな力に導かれていたことに気づかされま

す。あらためて感謝の気持ちでいっばいになります。そしてあの時の感動が、今も私の人生にひとすじの光明となって、心の中に生き続けているような気が致します。

※石田さんは高田の本町六丁目、家族皆が力を合わせて電気屋さんを営んでおられます。9年前に、高齢のお姑さんを見送った後、以前にも増して熱心に仏法を聞くようになりまし。今は地区の推進員の一人に加わっていらっしやいます。今回この原稿を頂いて、全く知らなかった一面を知り、驚きと一層の親しみを感じました。早い段階で原稿を頂き乍ら、今まで遅れましたこと、深くお詫び致します。

老人ホームの現場から

山崎 隆昌

「灯台下 暗し」

この場合の灯台とは岬に立つ灯台ではなく、室内を照らす灯台のことだそう。 (金田一春彦著「言葉の歳時記」に詳述) 禅の言葉である「脚下照顧」も少しニュアンスが違いますが同じ様な意である。

老人ホームに働く者にとって、この言葉はどのような意味があるのだろうか。私達はともすれば「あの施設ではこんなだったさ」とか、施設内においても「あの職種の人は云々」「入所者の重度化がどう」とか「人手不足による何とか」等、自分の外の状況や条件に目をうばわれがちである。

「灯台下」や「脚下」とは仕事に携わる自分の立場や責任、入所者と自分の関わり合い、仕事することの喜びや可能性のことなどをいうのだろう。

自分自身を取り巻くまわりの状況をしっかりと見さえ把握する眼を持つと同時に、見せる自己の脚下をはっきりさせ続けることが大切であると思う。

「解りやすい言葉」

老人ホーム職員が使う言葉で適切でないものを「禁句」(この物言いはあまり好きでない)と称し、使用を諫めた。それは言うまでもなく、職員の言葉により入所者の人々が不快な思いをしたり傷つけられたりすることを避けるためである。実際、言葉は暴力になる。

いなほ園で半日ボランティアをした人から「寮母さん達が話す言葉で時々解らない言葉があったよ、やっぱり専門用語かねえ」と教えられた。

よく考えてみると、僕らは意外と安直に「専門用語」なるものを使用しているようだ。

例えば面会に来られた家族に、「Aさんは最近暑さのためかバイタルが良くありません。私達も水分補給に努めるのですがうまくいきません。この状態が長く続くとA・D・Lも低下し、ベッドもギャジに換えなければなりません。」等。

一つ一つの言葉はその状態や事柄を表す最も適切な表現ではあるが、もう少し温かで豊かな、解りやすい言葉の工夫を考えたい。

## あゝ、カン違い

山崎 慎子

子供の頃、ほんの少し国語ができたというたったそれだけの理由で、私の意識の底には、私はちょっと字が読めて漢字も書けるのだよという厭らしい思い上りが根強くあり続けた。だから、印刷物の中の誤字や脱字がやたら気になり、他人の言葉の使い方の間違いや、勘違いした文字の読み方に我慢がならなかった。傲慢にも私はそんな間違いなど決してしないという思い込みさえしていたのである。学生時代、ケンケンゴウゴウか、カンカンガクガクかで仲間が二つに分かれて言い争いをしたことがある。確執の読み方をめぐってもカクシツかカクシユウかでもめたりもした。

大学生の息子が、部活がらみのお詫びを兼ねた送り状を書いている。やたら平仮名の多い便箋にあきれつつ口をさしはさんだ。「お取り計いの程宜しく、位は漢字で書いてね」「あゝ、そう」「よろしく

は分るでしよう。宣伝の宣だからね」確信に満ちて言う私に息子が答える。「残念でしたね。よろしくという字は宜という字で宣ではありませんよ。ま、よく間違えるらしいですけれど。」「……………」私はもう何十年もの間、一度も露ほども疑うことなく何十回、何百回、宣しくと書き続けてきたのだ。しかも平仮名の目立つ手紙を書く大学生である息子を上から眺めて嘆いてみせて、オチはこの通り。それ以来、この字を書く時は決して一度息を吸い呼吸を整える。手紙を貰った時もよろしく、と書いてあるとその一点で目が止まる。案外「宣」と書いている人はあるものでそんな時は、同類を見つけた安堵感でつい頬が緩む。自分の弱味を自覚して初めて他人の間違いいにも寛大になれたということだろうか。

当然のこと乍ら、勘違い覚え違いはこれだけに止まらない。他にもかなり強烈なパンチを喰ったのは「団塊」という字。一時「団塊の世代」という表現が流行した時、どういふ訳か聴覚を通してではなく視覚を通して触れることが多か

ったことと流行語への反発から、その内容を深く考えることもしなかったのだ。ダンコンのセダイと発音するのだと思ひ込んでしまったのである。塊を魂と勘違いしたのである。ダンコンは単純に男根を連想させ同じ流行語を作るならもっと響きの美しい言葉にすれば良いのにと憤慨していたのだ。ある日、ダンカイと発音するのだと知った時の衝撃。勝手に読み違えて憤慨していた私って一体……？ そういう反応をする自分の品性のお粗末さに愕然たる思いをしたものである。他にも同じ仲間がいると知らされたのは、ほとぼりが覚めた頃、娘にこの一件を話した時である。そしてその人は団塊の世代に属する人で、自分でも文を書きかなりの読書量を誇る人だと知らされた。

画龍点睛の睛もずっと睛と思ひ続けていたし、凜の字も凜なのだと思ひ込んでいた。一本多過ぎてリンとできなかつたという訳でもあるまいが。気がついていないというだけできつとこの他にも、うんと沢山の間違いを詰めこんでいるのだろう。